

イスマイル・カダレとアルバニア —ドルンチナをめぐる変奏—

岩田 好司

周知のように、イスマイル・カダレ（1936年ギロカスタル生）は現代のアルバニアを代表する作家である。『死の軍隊の将軍¹』の成功によって若くして国際的に知られるようになり²、何度かノーベル賞候補になっている。作品全体をここで論じるわけにはいかないが、多様な小説作品の他に詩、短編集、評論があり、かなり多産な作家であるといえよう。多くの国で翻訳されているが、特にフランス語には、ほぼすべての作品が訳されており、作品集も刊行中である。

ところで、このフランスでの人気は『死の軍隊の将軍』が映画化されたということの他にも、カダレが10年程前（1990）にフランスに政治亡命し、その後帰国が可能になってからもパリに住み続けているという事情が関係している。インタビューや、テレビ出演などをつうじてフランスでの知名度はあがっており、フランス語圏の作家の一人とも一部ではみなされている³。ただし、フランス語で自作を語ることはあるにしても、ミラン・クンデラのように⁴母国語を離れて創作活動を行うことはまずないだろう。彼とアルバニアの関係は、これから見ていくように、そうするにはあまりに濃密であるからだ。

したがって、彼はフランス語作家ではないが、フランス在住のフランス語で語る作家ということになって所属がやや微妙ではある。だが、そうした縁でフランスで作品研究がなされているし、四冊ある邦訳もすべてフランス語からの翻訳である⁵。筆者も残念ながらアルバニア語を解さないが、フランス語を通じてカダレ作品に触れることができたし、彼が福岡県久留米市に滞在し一連の講演会を行った際にも⁶、やはりフランス語で何度か歓談する機会をえた。

文学鑑賞には原語の理解が不可欠である以上、小論は本格的なカダレ論とはなりえないが、アルバニア語というマイナーな言語のせいもあって、あまりに知られることの少なかったカダレを紹介するという意義は少なくとも認められよう。

さて、このアルバニアは、アドリア海をはさんでイタリアの対岸、バルカン半島の南西部に位置する人口数百万の小国だが⁷、カダレ作品は、この国と切っても切れぬ関係がある。アルバニア語で書かれている以上、それを話す人々の歴史、文化を作品の背景とするのは当然といえば当然だが、現代アルバニアに関する生の素材には微妙なフィルターがかけられているし、遠い過去の歴史を素材としていたり、また、神話的、普遍的なテーマを扱ったりしているので、われわれ読者は、現代アルバニア史の抱える問題を失念して、作品世界に没頭してしまうこともしばしばある。もちろん、地域的な特殊事情から出発して、人間のもつ普遍的な問題に目を向けているところに、カダレ作品の文学的価値があることはいうまでもないのだが。

とはいえ、カダレがアルバニア社会の現実的な問題に対して直接的、批判的な言及を避けてきたのは偶然ではない。それどころか、この一種の自己検閲こそ、彼の作品がアルバニア現代史と不可分の関係にあることを雄弁に語っている。つまり、彼は第二次大戦後権力を握ったエンベル・ホジャの独裁政治の言論抑制下で執筆活動を続けなければならなかったということである。この全体主義的国家体制、その頂点にたつ独裁者、そして、アルバニアが耐え忍ばなければならなかった四半世紀以上に及ぶ国際的孤立など、現代アルバニア史の問題についての批判は、暗示的、寓意的にしか語られておらず、われわれ読者にはうかがいしれぬ部分が少なからず残った。

ところが、1990年のカダレのフランス亡命後、こうした事情は変わってきた。もはや秘密警察を恐れることなく本音を語るできるようになったからである⁸。さらにまた、独裁国家の恐怖政治のもとでは出版できなかった作品が刊行されてきている。その一つに『影』がある。この小説は、カダレと権力の関係が極度に緊張した時期に執筆されたが⁹、当局の弾圧を恐れてパリの貸金庫の奥深くに隠され、「不慮の事故¹⁰」が起こった場合に出版されることになっていた。幸いにもカダレは40年に及ぶ恐怖政治を生き延び、

小説は95年に出版されることになる。

この作品の横糸をなしているのは、遠くに嫁いだ妹のドルンチナを墓から這だした兄のコンスタンチンが連れ戻しに行くという伝説だが、このドルンチナ伝説にはすでに一作品がささげられている。いうまでもなく、『誰がドルンチナを連れ戻したか¹¹』である。伝説の生まれた中世アルバニアを舞台としたミステリー小説になっており、そこに伝説のもつ政治的解釈をかぎつけるのは難しい。それに対して、さらに出版年代をさかのぼると、カダレは『草原の神々の黄昏¹²』という小説で、やはりドルンチナ伝説を物語の下敷きとして用いているのだが、そこでは伝説のもちうる様々な解釈のなかで、アルバニアの国際的孤立にたいする暗示という政治的次元が開示されている。これは暗示とはいえ、小説がアルバニアとソ連との国交断絶の年（1961）を描いている以上、あきらかだ。

とはいえカダレが、ドルンチナ伝説の政治的寓意を明言するのは『影』を待たなければならない。この「遺書」ともいえる作品で始めて彼は、閉塞状態の中で苦しむアルバニア人の現実を暴露し、その解放の物語をドルンチナ伝説に託して語るからである。カダレ作品が高度な普遍性を勝ち得ていることは周知の事実だが、どんな特殊性を普遍化しているのかは、今まで必ずしも明らかではなかった。だが、『影』という特権的な作品で初めてカダレは、アルバニアの生の現実を素材として出発し、それを神話的（普遍的）なレベルに高める過程をわれわれ読者の前に見せてくれたのである。

本論では、ドルンチナ伝説をあつかった前二作でいかに、その政治的含意が隠蔽されているかをみてから、主たるコーパスとなる『影』の分析に入ろう。伝説の変奏を追っていくことによって、ともすれば見落とされがちなカダレと祖国アルバニアの熱い関係が浮き彫りになるはずである。

1 誰がドルンチナを連れ戻したか

カダレは非常にしばしばアルバニアの歴史に取材する。扱う時代は、諸侯が割拠していた中世から、ほぼ5世紀にわたるオスマントルコの支配を受けた近世、独立（1912）、二度の世界大戦をへて、ソ連、中国との国交断絶を

大事件とする現代史におよぶ。この意味で、カダレは故国の巨大な叙事詩を語りつづけているとあってよい。

ところで、作品中最古の時代を扱っているのが『誰がドルンチナを連れ戻したか』である。この小説は、アルバニア史を13世紀くらいまでさかのぼって、伝説が生まれるその瞬間にわれわれを立ちあわせる。物語の骨子を整理してみよう。

ある朝、遠く離れた中央ヨーロッパに3年程前に嫁いだ娘（ドルンチナ）が実家に戻ってくる。実家はある公国の名家なのだが、今は老母一人が大きな屋敷に住んでいる。なぜなら、ドルンチナがボヘミアに旅立った直後、9人の兄たちは戦争に行き、ペストに感染していた敵軍のために全員戦死してしまったからである。息子たちの嫁や子供たちも次々と家をでていき、ついに老婆は取り残されてしまう。そこで彼女は末息子のコンスタンチンの墓におもむき、彼が生前にした誓い（ベッサ）を守らなかったので、呪いの言葉を投げかける。実際、コンスタンチンは妹の遠隔地との縁談にしりごみする母親を説得するために、彼女が望む時いつでも妹を迎えに行き、連れ帰ると約束していたのだった。帰ってきたドルンチナは兄に連れてきてもらったと語るのだが、彼女を連れ戻したのは本当に、コンスタンチンなのか。この謎の解明をめざして、主人公のストレスが捜査を進めていく。

ミステリーの解釈は大別して3つである。

第一は、吟遊詩人たちに、延々と歌いつがれていったもので、ベッサ（誓い）を賞賛するものである。ベッサは伝統的なアルバニア社会を支える制度で、それを守るためなら死者でさえも立ち上がらざるをえず、現にコンスタンチンは、それほど重い誓いを守るために、墓から這出して妹を迎えに行っただとする説である。

第二は人類学的解釈とでもいえるもので、ドルンチナが遠くに嫁がされたのは、当時のアルバニア社会が族内婚から族外婚へと移行する過程にあり、族内婚に対する集団的ノスタルジーが、ドルンチナの帰還を事件にしまったとするものである。このノスタルジーの背景にあるのは、あらゆる社会の婚姻関係がタブー視している近親相姦の欲望であることはいうまでもない。コンスタンチンは妹に対する恋情を恐れて、彼女を遠隔地に嫁がせたものの、

恋慕は死よりも強く、ついには墓から出て会いに行ったとする解釈である。

第三の説はもっとも現実的なもので、ベッサのためにしろ、近親相姦のためにしろ、コンスタンチンが復活したことを否定し、すべてはドルンチナの狂言とする解釈である。伝説の真憑性を否定する説だが、この不確実性が伝説を伝説たらしめるものだろう。

以上のように解釈は様々にしろ、復活したコンスタンチンが妹を馬の背にのせて連れ帰ったとする伝説はバルカン諸民族に伝えられている。カダレがこの伝説にこだわるのは、この美しい口承文学を残そうとする審美的、文学的意図が関係していることは疑いがないが¹³、この伝説に感じられる政治的寓意の力もあったに違いない。

2 『草原の神々の黄昏』

国際的孤立というアルバニアの政治状況がなかったら、カダレは『誰がドルンチナを連れ戻したか』を書いたであろうか。もちろん書いたに違いない、とただちに答えたくなる。なぜなら、この作品には当時のアルバニアが苦しんでいた閉塞状態に対する言及などほとんどないからだ。むしろ東西ローマ帝国の確執や、オスマントルコの潜在的脅威のもとで、アルバニアは自国の殻にとじこもるべきだという意見さえ前面に出ている。この鎖国的体制は、たしかに歴史的事実なのだが、カダレが検閲をおそれてことさら体制順応的な見解を表明したとも考えられなくはない¹⁴。

とはいえ、ドルンチナの物語を書きながら、カダレが全くアルバニアの孤立という政治状況のことを考えていなかったかということ、そんなはずはないのである。そのことは、『誰がドルンチナを連れ戻したか』（執筆年1980）よりも前に書かれた『草原の神々の黄昏¹⁵』（執筆年1978）を想起してみれば明らかだ。ソ連と国交が断絶し、アルバニアの孤立が始まる前夜を扱ったこの自伝的小説の横糸として始めてカダレはドルンチナ伝説を用いたのだった。カダレの分身ともいえる主人公はモスクワ留学中だが、アルバニア、ソ連の関係悪化のために、実際のカダレ同様、留学を中断して帰国しなければならない。もしソ連と本格的に対立するようなことになれば、祖国の存亡の

危機である（「草原の神々が頬をふくらませてアルバニアを地上から吹きとばそうとしていた」 p.216）。

主人公にはロシア人の恋人（リダ）がいたが、国家を揺るがす大事件の前には、個人の感情生活などひとたまりもない。彼は、別れを予想していたかのように、自分の事故死を信じさせて、彼女を遠ざけてしまっていたのだが、帰国が決まってから別れを告げるために「復活」して、彼女に会いに行く（「時がきた。コンスタンチンよ、墓石をもちあげよ。」 p.209）。二人は「伝説の中で、生きた女と死んだ男が同じ馬にまたがっていたように」（p.212）街を歩き、主人公の宿舎につく。彼女に伝説同様の科白である、「ここに用事があるから」とだけ言って、ベンチが「墓の敷石のように見える裏庭」に姿を消してしまう。小説の末尾を読んでみよう。

彼女から遠ざかりながら、[...] 彼女が私を待っているところを想像した。かつて誰も帰還したことの無い地から、私が帰還するのをむなしく待っているところを。

『草原の神々の黄昏』 pp.217-8

この小説はカダレと権力との関係が悪化していた時代に書かれており、体制批判ととられかねない要素は慎重に避けられていたはずだ。だが、それにもかかわらず、国際的に孤立してしまったアルバニア＝墓というメタファーは明らかによみとれる。ただ、そのことの明言は、検閲をおそれずに書いた『影』の出版を待たねばならない。次の一節をただちに引用しておこう。

当時 [モスクワに] 留学していた僕たち若いアルバニア人はみな伝説の中のコンスタンチンを身近な存在に感じてたんだ。アルバニアはだんだん世界から孤立してきていたから、外国という生の世界から排除されるような気がしてた。一人、また一人と帰国して、いわば墓穴にとじこめられていたわけだから。

『影』 p.45

3 『影』

『影』が書かれたのは、40年以上にわたって独裁政治をつづけたホジャが亡くなる（1985）前後の時期で¹⁶、1961年に始まったアルバニアの鎖国状態に終止符がうたれると期待される頃である。つまりそれは24年前に始まった閉塞状態の出口にあたるわけで、その入り口にあたる時期を描いた『草原の神々の黄昏』の続編として、カダレが『影』を構想したとしても不思議はない。『草原の神々の黄昏』が、アルバニアの孤立の始まりをコンスタンチンが墓に入るところで象徴した以上、孤立の終わりはコンスタンチンが墓を出て、外部（生）と結ばれることによって暗示されなければならないからだ。実際カダレは『草原の神々の黄昏』を絶えずひきあいにしながら『影』の物語をすすめていく。

小説は当初、第一章の表題「なりそこないの映画作家の告白」を全体の題名にすることになっていたが¹⁷、その表題からわかるように、やや軽い調子で始まる。

冒頭を読んでみよう。

皆様、当エールフランス機は、まもなくオルリー空港に到着いたします。ご面倒ですが、シートベルトを着用ください...

ジェットエンジンのうなり。この尾をひく陽気なうなり声に、数千もの人の声や、犬の遠吠や、なつかしい音などが混ざりあって耳をおおう。教会の鐘の合間をぬって、「キリスト様が復活¹⁸なされた」と言う声が、遠くの方から聞こえてくる。それからまた、音楽やかほそいすすり泣きが聞こえ、合唱隊の喜びの歌がはじまる。

[...]

私の耳は、内面の勝利の叫びで震える。飛行機の扉が、棺の蓋のようにひらいたような気がする。カロヨンの鐘の音を古代の雷鳴がひきさき、私は墓穴から外に出る。

ガラーン、ガラーン、ガラーン...皆様...オルフェウスが地獄からはいあがる...パリの気温は13度...ハレルヤ。

『影』 p.9

「復活」して、「喜びの歌」が響きわたる中、「棺桶の蓋」をあけて外にでる。たんにパリに到着しただけなのに、あまりに大げさなのではあるまいか。ただ、この復活の喜びは、すでに引用した『草原の神々の黄昏』の末尾の重苦しさに対応している。アルバニアという閉ざされた死の世界から、華の都パリにでてくるのは、たしかに、復活に匹敵する大きなよろこびに違いない¹⁹。だが、「私」は所用を終えるとまた冷たい墓穴にもどらなければならない。ドルンチナ伝説のコンスタンチンのように。

第一章の軽快な出だしにもかかわらず、小説はしだいに重みをましていく。語り手がパリで知り合った女性との恋が、ドルンチナ伝説に重なりあい、やがてアルバニア民族の再生という神話的高みへと上昇していく。換言すれば、物語が生（パリ出張）から死（アルバニアへの帰国）、死から生（再度のパリ出張）へと往復運動を繰り返すうちに、螺旋的な精神の高揚がはじまり、「墓」、「復活」、「喜びの歌」など、冒頭では誇張と思われた表現が、誇張でなくなる次元へと高まっていくということだ。この高揚の螺旋運動をたどってみよう。

4 ティラナの友人たち

『影』のサスペンスは、やや俗悪な表現をするならば「アルバニアからパリに時々出張してくる中年男である語り手が23歳のパリジェンヌ（シルベージュ）をものにできるかどうか」と要約できるかもしれない。実際、シルベージュとの関係の進展が、語りの主たる関心だ。ただ、話者は、彼女とめぐりあった後も、なかなか心が燃え上がらず、その理由を延々と自問する。西欧に出てくると女性に欲望を感じなくなるのは「大使館の監視を恐れているのか、性病やエイズがこわいのか」（p.22）。そうかもしれないが、それだけではない。タブーのようななんらかの心理的障害が欲望をなえさせてしまう。話者

は、自分たちの関係をドルンチナ伝説に重ね合せ、シルベヌへの感情が、妹へのそれに似ていることが恋をさまたげていると考えたりする。

ならば、それでよいではないか、と思いたくなるが、このアバンチュールは、おかしな話しだが、個人のレベルを越えているのである。それにしても、話者が帰国するたびに、シルベヌとの恋の進展を聞くために集まり、話しに一喜一憂する首都ティラナの友人たちというのは奇妙な存在だ。彼等なぜ話者がパリジェヌを征服することを要求するのか。

〔友人たちが私のアバンチュールに関心をもつのは〕単なる肉欲からでも、ごく当然の女性に対する好奇心からでもなく、もっと奥深く、悲劇的な何ものかに発していることを、私は承知していた。どこかで読んだのだが、コリマの収容所のソ連人の政治犯たちは、どうしても外部に自分たちの存在を知らせたくて、イギリスに輸出される薪のなかに仲間の一人の腕を切断して入れておいたのだそうだ。私もまた、多かれ少なかれ、この身の毛のよだつ遭難信号の役割をおわされていると思っていた。

『影』 p.58-59

話者はシルベヌとのアバンチュールが、幽閉状態にあるティラナの友人たちにとっては、生の証しとなりうることを承知している。話者は彼等の代表として拘束された性（生）の解放を生きなければならないのだ。性の解放が生の解放になるというのは下手なしゃれのようだが、自己の性的能力に不安をいだいている男性にとっての性行為の達成は、単なる欲望の充足以上の意味をもちうるといえばわかりやすいだろうか。性能力の証明は、他者（異性）との関係の中に生きる人間の尊厳に関わることなのだ。

ところでティラナの友人たち、そして彼等が代表しているアルバニア人たちは、ある意味で去勢されている。つまり、性も含めて、より人間らしく生きようとする欲望を強烈に抑圧されているのである。

カダレは独裁国家について、こんなことを述べている。

独裁政治は、国を支配するために、人間らしい生活をゆがめる。自らが不可欠となるような世界をつくりあげて、人の暮らしをそれにおしこめるのだ。もし、名もない、何万、何百万という反逆者たちが、つまり、美しくなりたいという女性や、夕食をとりて外出したいという人々や、自国語の破壊に反対する人々が、人間らしい生活を守るために独裁制に反対したら、それを抑圧するために、独裁制は巨大な闘争をいどまざるをえなくなるだろう。

前掲『インタビュー』p.107

私たちはともすれば、カダレの作品が恐怖政治の監視のもとで書かれたことを忘れがちだが、少なくとも『影』に関しては、それを失念することはありえない。小説中に、独裁国家の威嚇のもとで生きる現実がたえず描かれているからだ。この政治が特に恐ろしいのは、威嚇が内面化されてしまい、「人間らしい生活」を欲望するやいなやほとんど自動的に罪の意識があらわれて、欲望が萎縮するというメカニズムが形成されてしまうことだ。性欲に関しても同様で、国家は、アルバニア人が外国（の女性）と関係することに抑圧的に介入してくる。

話者はシルベヌと並行して、もう一人の女性（マダムV）とのアバンチュールをもっているのだが、前者が停滞するのとは逆に後者は進展して、肉体関係に至る。しかしながら、話者はタブーを内面化してしまっているために、国家の生（性）の抑圧に半意識的にしか気付いていない。だから、この半無意識化されたタブーを破ることがどのような苦痛をもたらすかを予想しえなかった。マダムVのベッドに入るとさきほどまで高まっていた欲望が突如凍りついてしまう。国境を警備する「犬の遠吠え」（p.178）のようなものが、耳を離れずどうしても射精できない（p.180）。しかも翌朝話者は激しい罪責感におそわれる。「私はかつてないほどの恐怖の虜となった」（p.183）。とある教会に入る。

教会に入った。足がガクガクした。私をとらえていた、この

震撼がさらに激しさを増した。「お赦してください」、なんとか十字を切ろうとしながら私は言った。誰に何の赦しを求めているかも、よくわからずに。「お赦してください。もう二度としません」、と心のうちで叫んだ。[...]。

どうしてよいか、わからなかった。頭のとっぺんから、足の先まで、恐怖で凍り付いていた。「お赦してください」、と三度目に言ったとき、私は[キリスト教の]神に語りかけているのではなく、神以前の存在、神におとらず初元的で、情け容赦のない存在に赦しをもとめていることに気付いた。

『影』 p.184

ここで問題になっている罪悪感とは独裁国家が、国民に課した、他国（民）と関係をもつことを禁じたタブーに違反したことから生じたものだが、それだけではない。この罪責感とは同時に、この独裁政治、そして国際的孤立という悪をアルバニアに罰として与えた「存在」、キリスト教の到来より、ずっと古い歴史をもつアルバニアの「神」に対するものであり、ここに至って、話者のアバンチュールは、神話的レベルへと高まっていく。

5 シルベーナ

マダムVとの情事の翌日、話者は何か唐突なことが生じた感じがする。時間が錯乱し始め、「他の時代、他の場所、宇宙の裂け目からでた瘤のようなもの」(p.186)が話者の意識に侵入してくる。それはたとえば、アルバニア民族が耐えなければならなかった悪としての共産主義。その幻影が、パリを散歩する話者を襲う。

だれかに呼びかけられたような気がして左をみると、赤信号が悲劇的な光りを放っていた。共産主義の臭いがした。

[...]

セーナ川河岸に死体が何体か横たわっているのが遠くから確

認できた。国境の有刺鉄線が、死体に巻きつき、血溜まりが舗装を汚していた。この幻がどこから来ているのかを推測することは難しくなかった。アルバニアのポグラデック湖の石の多い岸辺から直接やってきていた。サランダ海岸からも...観光船のデッキから、観光客たちがそれを見つめていた。

驚くべき理由などありはしない、と私は一人ごちた。そこにあるのは、若者たちの骸だ。アルバニア国境を越えようとした若者たちの。それはおまえ自身の日でもある。サランダに夏の休暇で行ったとき、ある早朝、警察のモーターボートが岸辺を航行していた。甲板には、蜂の巣になった死体があって、それをイギリス人観光客が恐ろしげに見つめていた。

『影』 p.186

話者の日常的な意識の中に、非時間的なもの（ユングなら集合的無意識というだろう）が侵入してくると同時に、シルベーナとのアバンチュールも、宗教的、神話的（集合的）な意味を付与されていく。

時間の秩序を錯乱させるこの幻覚に私がとらわれたのには理由があるのかもしれない。すべてが破滅にむかって転落していかうとしていた [...]。それをひきおこした超越的な力に、シルベーナが組みいれられているような気がするがあった。神としてでも、半神としてでもなく、死の世界からの使いとして。だから、彼女が私に魔力をふるっているとはいえなかったが、代弁者、媒介者、あるいは少なくとも、事象の仮の解釈者としての役割を担っているとするならば、彼女もやはり何か隠されたパワーをもっているに違いないと私には思えた。

『影』 p.209

シルベーナは神そのものではないにしても、神的次元と関わりをもった媒介者、つまり巫女のような存在となる。もちろん、彼女と関係することを運

命づけられた「私」も同時に神話的次元に入り込む。「私」も、彼女同様、多数の同胞の代理的、象徴的存在となるのだ。

彼女にどのように説明したらよいのか。私は何千という人々の渴望、性欲、同時にまた、やさしさと憤怒をもってパリに来ているのであり、彼女もまたシルベーナという一フランス人女性にとどまらず、これからは聖書の女、不可能の象徴、眠れぬ夜の夢となるのだ。私は彼女をつかみとり、自然の法則にさからって、肉体をもった象徴とすることができるのだ。

『影』 p.198

ここで、シルベーナは「聖書の女」と形容されているが、カダレはもちろん旧訳聖書にしばしば現われる、イスラエル民族再生の物語²⁰を念頭においている。実際、話者と彼女の性交は、アルバニア人の復活を引き起こすと考えられているのだ。

私と彼女の体が少しでも触れただけで、砂浜に横たわる死体が突如動きだすかもしれない。一人一人立ち上がって、よろよろと目を血走らせて自由への道をふたたびたどりだすかもしれない。

『影』 p.199

だが、話者とシルベーナとの性交がなぜアルバニア民族の再生をうながすのか、もちろんわれわれは自問してみることができる。しかし、答えはさほど困難ではない。まず、二人の恋が、そもそもドルンチナ伝説に重ねあわされていたことを想起しよう。あるいはまた、パリに到着した主人公はアルバニアという墓から復活したコンスタンチンにたとえられていたことを想起してもよい。そして、ティラナの友人たちもまた、話者に自分たちのコンスタンチンを見ていたのだ。話者は友人たちを代表して言う。

私たちにはどうしようもなかった。コンスタンチンの求めに応じないわけにはいかなかった。彼の運命に私たちのそれを重ねあわさないわけにはいかなかった。[...]。

私たちは闇の底から立ち上がり、メッセージとか合図を送っていたのだ。しかし、この世の人にはたぶんそれが理解できなかった。死人の言葉を理解するのはけっして容易ではないからだ。

どんな呪いが私たちを立ちあがらせたのか、どんな誓いを私たちは守らなかったというのか。

『影』 p.227

ドルンチナ伝説によれば、いつでも妹を連れ戻すという誓いを守らなかったコンスタンチンに、母親が呪いをかけ、それがコンスタンチンを復活させたわけだが、どんな誓い、どんな呪いが、主人公をアルバニアから出国させ、シルベーナと近親相姦を行うようにさせたのか。そのそもなぜ、シルベーナと関係することが近親相姦なのか。つぎのさわりを読んでみよう。

さまざまな事情があつて、私はシルベーナと親密になれずにいたが、それは祖国アルバニアが世界中から孤立していることの一端をなしており、だから、このアバンチュールは宿命的な性格をもつことになった。私はこの宿命に打ち勝ち、運命の国境を超えなければならなかった。自己の民族にふりかかった呪いを振りはらおうとする者のように、「鎖国」を打ち破り、「東(欧諸国)」を脱し、私のヨーロッパ的存在になおまわりついでいるアジアの束縛から解放されなければならなかった。

『影』 p.197

これで、「目から鱗」というわけにはいかないが、解釈してみよう。ここで言われている「自己の民族にふりかかった呪い」とは、アルバニアを太古から支配するアルバニア民族の神がアルバニア人にかけての呪い、つまり、現

代史の「悪」であるところの独裁制と国際的孤立であり、「鎖国」を打ち破り、「東」を脱するとは、「アジア」（共産圏）の束縛をふりはらって、ヨーロッパと再び結びあわされることである。

カダレがここで表明しているヴィジョンは非常に大きなひろがりをもっている。アルバニアは歴史的に言えば、ギリシアを起源とする西洋に属していたが、東洋（オリエント）からの圧力をたえず受けて、東西のはざまを揺れ動く存在だった。今世紀に入って5世紀にわたるオスマントルコ支配を脱したにもかかわらず、ソ連、東欧圏に組み込まれてしまい、その東側からも、西の果てに追いやられて瀕死の状態にある。このアルバニアが再生するには、アジア＝オリエントの軛を破り、かつて同じ家族に属していた西洋と結ばれなければならない²¹（近親相姦）。

このように、「私」はアルバニアの再生を誓って、墓穴を出たコンスタンチンであり、アルバニアの象徴として、ヨーロッパの象徴であるシルベヌと近親相姦的に結ばれたとき、アルバニアは自由を取り戻して復活するかもしれない。だが、それは神の意志（呪い）に反抗することであり、絶望的な賭けとなるだろう。

『影』の物語は最終章を迎える。

6 死と再生の物語

小説のタイトルに過度の意味付けを行うのは禁物だが、『影』という表題の示唆するところを考えてみたいという誘惑にあらがうことは難しい。まず考えられるのは、「死者」、「亡霊」という意味で、それは話者のみならず、独裁制下にあるアルバニア人一般のことを示唆しているように思われる²²。次には、主人公の分身ととれ、それならば小説中たえず比較の対象となる「モスクワの友人」がそれにあたる。小説家であるその友人は人気を博しながらも権力の怒りをかって強制労働にまわされる。カダレの分身とみなしてもかまわないが²³、実際のカダレというよりは、こうもありえたもう一人の「私」といった、ユング心理学でいう「シャドー」的存在だ。

さて、タイトルの示唆する3番目の意味は、独裁者ホジャのことであり、

「影」のように国民一人一人を監視する存在である。最終章では、この独裁者は、史実どおり、視力を失うが、影＝闇と同盟して強力な支配力をもつに至る。

パリから帰国した話者は、ホジャ失明の知らせをうけたところだ。

あつというまに黄昏時となった。夜闇が急いで降り来ろうとしている気がした。彼〔独裁者ホジャ〕が盲目になったことと関係があるのだろうか。

しかし、私が本当に恐怖をおぼえたのは、寢室のドアを閉め、一人でベッドに横たわってからだ。窓ガラスが闇の圧力でたわんでいるかのような気がした。このとき、私はことの真相を理解した。夜と同盟を結んだ独裁者はパワーを倍加する。「彼」と夜が組んで、われわれ皆を屈服させるだろう。二人の重圧を前にしては、私たちはこの湾曲した窓ガラスよりも弱い存在だから。二人の圧力がガラスを破り、この最後の防壁が崩れた後は、ホジャの盲目がわれわれすべての視力をうばってしまうのではないかと時に思われた。

『影』 p.233

このアルバニアを覆いつくす、ますます強力になった闇の力に、話者もしだいに飲み込まれてしまう。増大する恐怖のなかで、目は角膜剥離をおこし、友人たちが自分の「初七日」をやっているような感じがする（「もはや私はアルバニアを離れることはない。大理石の墓の敷石が閉じてもう開くことはないだろう」 p.238）。

前回のパリ出張からの帰国後、40日が経過し、話者は狂気のふちに追い込まれるが、突如として「最後の審判のように」（p.243）電話が鳴り響いて、もはやありえないと思っていたパリ行きを命じられる²⁴。絶望が大きかっただけに、この「墓」からの外出、つまり「復活」は話者の魂を高揚させる。

アルバニア民族の精髓を安全な場所に運んで時がくるまで冬

眠させる役割を、私が負わされたのかもしれない...私はまったく平凡な人間だったが、二千年前にキリスト教の神が、ただの大工の息子を自らの子としたように、神々が私をお選びになったのかもしれない...

『影』 p.248

悪によって絶滅寸前のアルバニア民族の「精髓」を救い出す神命を、その悪をもたらした神々自身が出すというのは矛盾だが、神話にはこの手の矛盾があふれていることは周知のとおりだ。いずれにしろ、この神命をおびた話者（コンスタンチン）がなすべきことは一つしかない。シルベヌ（ドルンチナ）のところへ行ってアルバニア民族の種をそこに射精することだ。

彼女は服を脱いだ。私たちがベッドに倒れこんだとき、寝室の四方の壁が狭まり、床がくぼんで墓穴の底に落ちたようだった。

落下は恐ろしいものだった。[アルバニア人の]種がすすり泣き近親相姦に最後の抵抗をこころみているように思われた。意志という残酷な鞭と罪悪感、そして懲罰の恐怖が同居していた。

『影』 p.251

他国（の女性）と関係をもつことは独裁者（神の呪い）によって禁じられている。しかも、その女性（西洋）とは近親にあたる以上、この交合は二重の禁忌にたいする侵犯となる。それゆえ、「墓穴」への落下という比喩はけっしてオーバーなものではないだろう。とくに近親相姦は神にのみ許されるものであり、それを侵犯するとは、人間の領域を越えることである。

話者は、「背骨に非人間的な痛み」を感じながら射精する。ほとんど、宇宙的な射精だ。

精液はついに私を離れた。そして世界の果てと果てが分離す

るところにできた闇に浮かぶ氷塊のようになお凍えたまま、おのきながら彼女の腹中深く入っていった。

『影』 p.254

ついに運命的な行為が達成されたわけだが、話者は近親相姦よりも大きなタブーを犯してしまったことに気付く。

暗闇を走るタクシーの中で、私は半分目を閉じて落下を待った。シルベーナとの性交が、ますます、おぞましく感じられた。犯した罪は近親相姦ではなかった。それは、表面的なタブーにすぎず、その底にはもっと大きな悪が隠されていた。私が侵犯したのは、もっと大きなタブーだったのだ。私はこの生者の世界にある条件つきで、やって来たのだった。私は許可されている形態に従わなければならない死者だった。私の国籍からいっても、身分をわきまえない存在だった。

『影』 p.254

二つのレベルの罪が重なり合っている。現実のレベルでは、鎖国状態にあるアルバニアから公務で出国できたとしても、公務中に、外国しかもブルジョア社会（の女性）と親密な関係をもつことは許されない。また、神話的レベルでは、神によって課せられた悪（独裁制）、そして死（鎖国）にあらがい、一時的な生を利用して、生者（シルベーナ）を犯したことは神に対する冒瀆である。とくに、神によって課された死から逃れようとしたが故に私は罰せられねばならない。また、神によってアルバニアに課された死からアルバニアを救おうとしたが故に、私は罰せられねばならない。私は境界（国境）を越えてしまったのだ。

死の威嚇と恐怖が極限に達し、「私」は何者かに殴られたかのようにエレベーターのなかに倒れ込む。

一撃は電光石火だったので、私は何も感じなかった。エレベ-

ターは、バキバキと鎖をくだき、扉や格子戸をもぎとりながら、2階、3階と、どんどん上昇していった。ふたたび犬が吠えはじめ、十字架に釘を打つ鎚の音がきこえる。有刺鉄線にひっかかり、血だらけになったが、私は引き返さなかった。その時私は、信じられないことが起こったことに気付いた。私は国境を越えており、しかも、殺されてはいない。

『影』 p.257

「私」が罰せられずに生きているということは、アルバニアに課されていた呪いがとけたということの意味し、ならば、生と自由を取り戻した「私」につづいてアルバニア民族全体が復活できるはずだ。

喜びにあふれた最終節を読んでみよう。

私を昇天させているのはもはやエレベーターではなく古代の賛歌であり、私の後に何千、何万という人々が続く。高貴で厳粛な、すべての世代のアルバニア人が、死の氷河を後にして、カロヨンと喜びの歌が響きわたる中、私のあとについて、昇天を続ける。

そして、告げられる。

「アルバニアが復活した。アーメン。」

7 結 語

血にまみれた主人公の後につづいて、幾世代ものアルバニア人が昇天していくイメージというのは、ドラクロワの「自由の女神」よりも壮大、荘厳な図だが、われわれ現代日本の読者からすれば、この高揚感にはついていきにくいものがあるかもしれない。そもそも、国家の運命と自己のそれを同一視する主人公（カダレ）の視点にはなじみにくいだろう。幸運にも、今の日本には、解放されなければならない政治的束縛はないし、国家の命運など気にしなくてもよいほどの平和を享受しているからである。

このカダレと現代日本人の（政治）感覚のギャップをうめるのは容易ではないが、『影』の末尾で表現されている喜びの背景にあるアルバニアの政治状況とカダレについて一言述べておきたい。

アルバニア史上初の独裁者ホジャが権力を握った時（1944）カダレはわずか8歳の少年だった。つまり、彼は自由を知らない世代に属し、それゆえ諦めとともに独裁制を受容していたし、共産主義を信奉してもいた。そうした彼と権力（ホジャ）の関係が悪化し始めたのは1968年のことであり、その後独裁者の死までの17年間、カダレはホジャの影におびえることになる。

17年のあいだずっと私は、「最高指導部の噂」と密かに名付けていたもの〔上層部あるいはホジャはあなたに悪感情をもっているという噂〕に苛まれることになった。[...]〔権力との関係が〕とくにひどかったのが、1973年、1975年、1982年、1983年そして、独裁者が死を迎えるまでの1985年だった。死の威嚇を身近に感じた。それは、姿をかくしてファイルからファイルへと忍び込み、夜の蛇のようにしゅうしゅうといった。私はこの不安感を『夢宮殿』で表現しようとした。

（『十字架の重み』 p.312）

『夢宮殿』のみならず、『砕かれた四月』をはじめとして、カダレ作品にただよう、張り詰めた糸のような緊張感、そして死の不安はカダレをめぐる政治状況と不可分であることがわかる。もちろん、カダレは手をこまねいていたわけではない。気の狂いそうな恐怖や、陰謀、脅し、いやがらせに耐えながら、文学をつうじて独裁者とたたかったのだった。そして「それは正しい選択だった」（上掲書、p.538）と彼は確信している。

『影』の執筆は、権力との関係がとくに悪化した80年代前半に主として行われている。この時期は同時にホジャの糖尿病が悪化し（失明）、死期も遠くないと予想された時期だった。国民の多くが独裁者の死を待ち望んでいた。「1984年の暮れから新年にかけてほどティラナの人々が踊ったことはなかった。[...]、踊ることによって独裁者の死を早めようとするかのように」（上

掲書、p.545)。

翌年4月10日、ホジャは他界し、葬儀では「彼を愛していたものも憎んでいたものも、彼を悲しんでか、自分を悲しんでかよくわからずに皆泣いた」(上掲書、p.548-9)。40年以上にわたって権力を掌握した独裁者の死は国民を複雑な気持ちにさせただろう。終戦の知らせが日本人をそうしたように。

ただ、17年間の戦いを強いられたカダレは、深い解放感を味わったであろうし、アルバニアの復活を強く期待したに違いない。

*

ホジャ没後のアルバニアが自由をゆっくりと取り戻していくのは80年代後半の東欧民主化の波をうけてのことだが、98年現在でも政局は混迷を脱していない。いずれにしろ、混乱をさけてパリにいるカダレが、自由に執筆と発言をつづけるにつれて、独裁制下のアルバニアの状況が明らかにされていだろう。そしてそうなれば、検閲下で書かれたカダレ作品にも新たな光りがあてられていくものと期待される。

註

- 1 Ismail Kadaré, *Le général de l'armée morte*, Albin Michel, 1970 (1962-65). 本稿でのカダレ作品のリファレンスは、筆者が参照したフランス語翻訳版のものとする。なお、作品末に執筆年が記されている場合には括弧に入れて表示する。ただし、カダレによれば、検閲を逃れるために虚偽の表示をした場合もあるということである。
- 2 「国際的に知られるようになったのはいつですか」、「『死の軍隊の将軍』がフランス語に翻訳されてからです [1970]」、『インタビュー』(Ismail Kadaré, *Entretiens avec éric faye*, José Corti, 1991 (1990)).
- 3 1996年、慶應大学で開催された国際フランス語教授連合第9回世界大会にフランス語圏の作家としてカダレはシンポジウムに招待され、来日している。シンポジウムについては、加藤晴久編『フランス語の祭典』、朝日出版社(1998)中、以下の論文参照。三浦信考、“フランス文学をクレオール化する？フランコフォン文学の問うもの”、pp.291-294、お

よび、石橋晴巳、“フランス語圏作家達の結集”、pp.398-399。

- 4 クンデラが表現手段としての母国語（チェコ語）を断念した経緯については以下参照。西永良成、『ミラン・クンデラの思想』、平凡社選書、1998年、pp.160sq。カダレには幸運にも、Jusuf Vrioni という旧知の翻訳家があり、アルバニア語で書かれた作品がわずかの時差でフランス語訳されるという状況ができあがっている。
- 5 カダレの邦訳は以下の4作品。『誰がドルンチナを連れ戻したか』白水社、1994年。『夢宮殿』、東京創元社、1994年。『砕かれた四月』、白水社、1995年。『草原の神々の黄昏』、筑摩書房、1996年。
- 6 1998年9月21日から26日まで久留米市に滞在し、3回の対談、講演を行なった。22日、「生と死」と題する、能楽師大槻文蔵氏との対談（久留米市石橋文化センター）。24日、「世界遺産から見た観光と文化」（久留米大学）。25日、「アルバニアの神話的世界」（福岡大学）。
- 7 人口は344万人（1995年推計）。ただし、コソボ自治州（ユーゴスラビア）には250万人、トルコには100万人のアルバニア人がいるといわれている。
- 8 たとえば、『作家の仕事部屋への招待』（Ismail Kadaré, *Invitation à l'atelier de l'écrivain*, Fayard, 1991.）には、カダレ作品の制作状況についての説明が収められているが、検閲下で執筆されたものだった。それに対し、同書の後半には、『十字架の重み』（*Le poix de la croix*）があり、これもやはり検閲下で書かれたものだが、弾圧をおそれて暗号化され、隠されていた。フランスへの亡命後、解読して同時に出版された。カダレがいかに独裁制と闘いながら執筆をつづけたかを語る貴重な証言になっている。
- 9 *L'Ombre*, Fayard, 1994 (1984-86).
- 10 『影』、裏表紙の解説による。また、前掲『十字架の重み』、p.501sq 参照。
- 11 Ismail Kadaré, *Qui a ramené Doruntine?*, Fayard, 1986 (1980).
- 12 Ismail Kadaré, *Le crépuscule des dieux de la steppe*, col. Folio, Gallimard, 1981 (1978).
- 13 『アイスキュロス論』（Ismail Kadaré, *Eschyle ou le grand perdant*,

Fayard col. Livre de Poche, 1988 et 95.) で、カダレはバルカン諸国に伝わるドルンチナ伝説が、その素晴らしさにもかかわらず、世界文学の古典にならなかったことを残念がっている。それを作品に高める作家がいなかったせいだが、その理由は、バルカン半島がたえず大国に従属していて、自由がなかったからだと解釈している (pp.66-67)。

- 14 1970年代はじめ、『おおいなる冬』(Ismail Kadaré, *Le grand hiver*, Gallimard col. Folio, 1978 [1971-76]) が権力の反感をかい、カダレは筆を折ることを示唆されたにもかかわらず、6小説を書いてしまった。「6小説だって。[国家にたいする] 契約違反だ。罰をうけるだろう。[...]。国に対する奇妙な罪悪感におそわれた」(前掲『十字架の重み』、pp.412-3)。
- 15 初稿は1958-60年のモスクワ留学中に書かれたと推定される。cf. 前掲『インタビュー』、pp.55-56および前掲『十字架の重み』p.406。
- 16 1983年にはすでに草稿はできあがっていた (cf. 前掲『十字架の重み』、p.530)。84年から86年にかけて、半暗号化されてパリに運ばれ、94年にまた手を加えられたもようである。
- 17 著者の言による。
- 18 以下、引用文中のイタリック体は、特記しない限り、筆者によるものとする。
- 19 「『影』の中で、西洋にしばしば出張する東側の男の旅を死の王国からの一時的な脱出にたとえた。こんな気持ちがあったから、私はコンスタンチンの墓からの脱出と中央ヨーロッパへの騎行というモチーフをしばしば用いたのかもしれない。／パリに到着するたびに [...] 肩から小石や土くれが落ちているような気がしたものだ」(前掲『十字架の重み』、pp.503-4)。
- 20 たとえば、エゼキエル書37章。
- 21 実は、このヴィジョンはカダレの政治思想から発している。1961年のソ連との国交断絶によって孤立したアルバニアの活路は、かつての母、ヨーロッパと結ぶこと以外にない。国際的知名度をあげたカダレは、「西」との掛橋となることを自らの使命としていた。それが国民の利益にかな

う以上、独裁者に協力することも辞さなかった。「この2年で私は西洋で知られた作家になっていた。執筆中の『大いなる冬』を通じて、私は西側とホジャの仲介者となることができる。つまり、10年前[1961年、ソ連と国交断絶の際にホジャが望んだにもかかわらず]拒絶された西洋との友好関係を、ヨーロッパ大陸でもっとも不運なアルバニアのためにうちたてる橋渡しをすることが私には可能だった」(前掲『十字架の重み』p.340)。

- 22 同時にパリにやってきた、4人のアルバニア人視察団とモンパルナスを歩きながら話者は言う。「私は、[...]生者たちの喜びを眺めるために遠くからやってきた4つの影にかこまれた、耳の不自由な影だった」(pp.119-120)。
- 23 カダレ自身の伝記的事実が随所に取り入れられている。一例だけ挙げる。『影』のなかで、話者はモスクワの友人を次のように非難する。「君はある程度の成功をおさめて、すでにオリンポスの山に達したと思っているが、転落に用心したほうがいい」(p.85)。ところが、これはカダレを非難するためにもうけられた総会で、当時アルバニアのナンバー2だったラミズ・アリアが述べた結論に重なる(「人民と党は君をオランピアの山頂に押し上げたが、君が誠実でないなら、人民と党は君を地獄に落とすだろう」、前掲『十字架の重み』p.451)。
- 24 これも実話に酷似している。cf. 前掲『十字架の重み』p.504sq。

参 考 文 献

中津考司、『アルバニア現代史』、晃洋書房、1991年。